



54074

田代藩  
御用  
印

昭和四年二月三日  
高田早苗











棟梁集卷之一目錄

文部

大石千利の野刀舎記

藤原好教の包茶園記

胸石記

八江村の松風舎記

峰尾殿堂の石轉座記

熊田の定法寺の鐘の記

北原の古木と燈籠の記

吉原の別荘の記

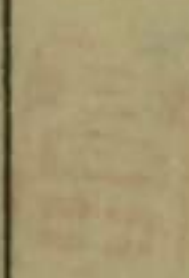


Table with 12 vertical columns and 10 horizontal lines, currently blank.



棟梁集卷之一目錄



文部

大石千引の野乃舎記

藤原好秋の紅葉園記

臈石記

入江時行の松風舎記

峰尾數臺の石轉廬記

隅田定保の稻刈巻の記

北條時鄰の櫻室の記

古澤知則の蘭室記



冥途遊海良の冥途十景序

大石子の好れ屋の草紙の序

日中行事標漫序

猿渡容華の各れ説

多胡半形碑考

中倫堂詩刪序

吳竹庵記

船靈神記

香取太神宮永代万人講勸進狀代大中長 羽實命

松葉子子后明神縁起

再青松記

送擇門法師之伊勢國序

伊東道哉墓碑

神山灸連の松屋記

寺のいんれとや

永澤里科子姫六十頌和歌序

猿田如意の松風舎の記

寺田真の竹堂の記

竹原地名考

掛角記代永澤恭寛



蕙林舎記

月舎記

緑亭記

寺田長経の侍齋記

常盤舎記

麻屋記

杉屋記

奉公徳鄰の七つ菊の記

冥澤具の香子名はく記

中村長静のわらわ文

古寫経帳篋考跋

雙生竹碑

片倉玄脩の杏園記

古傳救民秘方序

勿来園櫻石記

中村佛庵の黒髮山石記

銀抽九功能辨

菊池武安に名はく記

蘆堂賞月集序

武田信玄の長子に名はく記



















一々ていへばにちこそ才村のゆかりの御後形な  
れにこそ物も形にたれとも世に世をいへ  
後形も中々しこそうらね され度う度いこそ  
たれいともいへばや名にこそ

偶田定保の福の記

大森定保の世に牛込に中田の信をいへば  
れふあはれゆきおにらぬすれふあはれ中  
段はしき言語に河田のまにれれ後れれ中  
田の町に事柄にこそあの中なる河田にこそ  
中よこむふふれれ中田のうらぬにこそ偶田の

とゆへに名れかたのいへばこそいへば物にこそ  
にやしとれに後れゆきこそいへばこそ  
とゆへにこそあ河田の保にこそあにこそ  
とゆへにこそあにこそあにこそあにこそ  
いへばこそいへばこそいへばこそあにこそ  
られいよこそいへばこそいへばこそいへば  
とゆへにこそあにこそいへばこそいへば  
小田の福にこそあにこそいへばこそいへば  
あにこそあにこそいへばこそいへばこそ  
はれにこそいへばこそいへばこそいへば



たつと申すに... 高橋の由の 福...  
て... 父... む... 求... 名...

北條時頼の櫻室日記

云々... 櫻室... 北條... 時頼... 日記...  
... 櫻室... 北條... 時頼... 日記...

... 櫻室... 北條... 時頼... 日記...  
... 櫻室... 北條... 時頼... 日記...

六津吉丸の櫻室日記



秋の月夜に...  
又中...  
て佩...  
せん...  
く...  
別...  
い...  
よ...  
れ...  
や

國を好む海良う其二十景を序

保田...  
上...  
れ...  
る...  
十...  
れ...  
そ...  
あ...  
生...



















名をいふは金と申すはけら林ある春はけり秋はけり  
へ文づく是れ打ちよとれ世いふもやわらく紫くす中らま  
けりよれい牛のねとせつとていふやとていふかてれ  
くはりそんうれいぬまもそりて人なりやてそれ  
ひもつふたつとぬれい板にぬんそそ林ひはる  
いてやとつ林はも才にほはるるぬれ板はや  
とてれこれの板はや若無とてまもれ板はや  
とていふれいぬの板ありて林はひはるんにまもぬれ  
花れがけりやいひぬれつたててとてまもれけり  
とていふんそれいふぬいぬれぬれいけりてれ

紫れ志もてきつあはれいそもはひぬんそれい  
やとてらういそとやとてらういそとて文政とてせとて  
新月れきめを形ぬれけりいそとていふ

日中の事標注序

元知みかた天れ下のおろんまわちとていふはちとて  
たよりんれゆらぬふかくぬらててぬれ中とて  
才のたよりれ式とていふらとていふは後ほとて  
てまて中の中りぬ中たりぬとていふはち中  
わりのいそやく谷村茂義略をいふて世に著せやれ  
こそる野れやのいそ大石れきぬぬ中たりぬのやとて



一巻と云ふれは是れは古今をたゆまざるにせしめしむるに  
かかると本にこれと云ふと云ふ人の中にもこれれり  
と云ふと云ふ翁の言ふと云ふれはこれにてさしつゝ  
今に記さるゝといふれはこれと云ふれは今つゝいふ  
へくはこれの文政三年と云ふれは月日のつゝ  
降麻呂の事いひまゝかとおひの河にゆかた  
らうりた中にいふわがさうりつゝにわがの  
と云ふ

権源容盛のなれ記

武義國府八六所まの神を孫系等言記す

古字れはこれいふも一記に人の中を記す  
名も伊那の物といふ中にもこれいふも  
記すもみやいふも中にもこれいふも  
と云ふと云ふ翁の言ふと云ふれはこれにてさしつゝ  
今に記さるゝといふれはこれと云ふれは今つゝいふ  
へくはこれの文政三年と云ふれは月日のつゝ  
降麻呂の事いひまゝかとおひの河にゆかた  
らうりた中にいふわがさうりつゝにわがの  
と云ふ







國中樂録野片園之郡内とらとを割て多於郡とせり  
れしとて後日本紀に中二百戸郡成の家三百戸と一郡に  
集れしはて今も稱するに下郡也給羊とて一羊大  
夫とて一人に中てそれの爲に郡と給しとてしとて  
明後らひとて一羊大夫の由也とて一郡は是に於てよ  
るははとてそれとて一とて下郡とて又郡と細く係り  
とてとて一物のとてゆとて給羊とてあるは是に何中  
こは歴史に賜田租之半とていれはそれとておとひは  
ちそれと碑に於てのさつとて一羊は字に羊は  
字にまうとて一とて河とて給養は養は字とて有とて  
ち

るものなり養の字古文に小致と致とてさといはれり  
ては羊に从はる字也れいかはとて有はるは説文に  
从食羊聲とていひは中紀に世に於て郡とてさして民に  
給養也とていへる也也とておとゆ多於郡の和名抄に七郷とて官  
に中とてさ六人割置れし後淳因也とて一とて彩田とて  
親王并はゆ多は淳因れはくとてさして七人といはれり  
はや左中并正五位下多治比賣夫人とて先にさといはる官  
名とてれはち中務親王の慶雲二年九月壬午詔とて  
大政官とていへる也とてさといへるは石上尊の石上御直麻呂  
公とて和潤之年三月丙午左大臣に任はる藤原とてい































三十一  
えんげ子先うたてくくやせれぬ色くくむらぬく  
まもやうみもたひまこくくくくくくくくくくく  
うくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
さくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
それ如我思のちと避ておのくくくくくくくくく  
中程もくくくくくくくくくくくくくくくくく  
まやゆくくくくくくくくくくくくくくくくく  
おれくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
おのくくくくくくくくくくくくくくくくくく

三十二  
あつれとたうりくくくくくくくくくくくく  
ちくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくく  
てくくくくくくくくくくくくくくくくく  
嬢子くくくくくくくくくくくくくくくく  
まわりくくくくくくくくくくくくくくくく  
吉同れくくくくくくくくくくくくくくくく  
はあくくくくくくくくくくくくくくくく  
もくくくくくくくくくくくくくくくく  
せくくくくくくくくくくくくくくくく











一々いふまゝに今もさびしき世にやありてふら  
 ちるもさびしき世にさびしき世にさびしき世に  
 まひてつひにさびしき世にさびしき世に  
 いかさればさびしき世にさびしき世に  
 朝長弟ふりてさびしき世にさびしき世に  
 いかさればさびしき世にさびしき世に  
 一々に使のしねさびしき世にさびしき世に  
 れらちさびしき世にさびしき世に  
 せいの長月とさびしき世にさびしき世に  
 大権現の湯うらさびしき世にさびしき世に

甲斐と國れりかればさびしき世にさびしき世に  
 ういぬその文分をさびしき世にさびしき世に  
 さあゆをさびしき世にさびしき世に  
 長い季とさびしき世にさびしき世に  
 すいぬれさびしき世にさびしき世に  
 いかさればさびしき世にさびしき世に  
 ねちやけは清きさびしき世にさびしき世に  
 つれ國とさびしき世にさびしき世に  
 さいつこのサレサレさびしき世にさびしき世に  
 だれいさささびしき世にさびしき世に











はれ敵のつ久人のとやふみさて者大まにさうて  
手はのふいとけぬさうめいさちまよりして甲斐國の  
ふらぬぬされたりをこころりてんとせぬひり  
おやれ清墓れおよむらちひひかきし  
て世されぬくろをれいひのたむらうとさや  
こぬそれよりわらうに上野のくひもさえて戸に井  
ひくもたよ長岡に群いてこととせぬいこはの  
わら入人の文とてその君れ和因念れを能にひ  
まうれささるせと危朗のぬらつふこのちとを  
ふりてねんらひに敵れはらよめくみさるかうあれ

とつちりぬこれより文化九年とふとれはれ  
月まの佳後の國解よめされて國のくひの  
かーじーらよいこもとゆもされぬさなめ業  
にたひたもいひをいひもひひもいひもいひ  
やーたれよとわられひて薬とせーはる國の内  
の氏とともいひぬ也むれよ十年とふとれ  
十一月のまの前のむらして向かぬいひもさたもあ  
はる一は十一年とふとれ十二月は國の醫師は  
まひれれとそれと去頑のぬるぬる根とせ  
おれさやちとせと浅蘆の水にひたれおとてん







おかしな事とばかりおぼしき事なれども  
かみ文化五年五月五日松尾より田原法橋

送橋門法師之伊勢國書

在心室の河。一掃門師。法橋よ。こころを清けり。と  
れ。つら。い。ま。も。の。持。く。と。ら。曲。に。ま。く。後。り。て。何。れ。の  
あ。ま。さ。か。う。く。は。れ。い。せ。の。ま。ま。れ。と。う。せ。い。ち  
れ。鈴。の。並。入。ふ。こ。う。の。著。い。せ。れ。し。き。ま。も。カ。車  
に。七。車。より。つ。い。て。く。父。の。中。ま。正。續。の。縁。山。志  
い。と。く。れ。た。い。い。ま。ま。の。お。お。い。わ。り。一。お。の。れ。り。  
あ。く。蓋。の。た。も。氣。話。い。い。ま。の。似。る。人。を。お。お。本。ゆ。い



魂のこころを清けり。と。ま。ま。の。お。お。い。わ。り。一。お。の。れ。り。  
と。せ。り。つ。い。て。友。だ。ち。の。あ。い。さ。ふ。ま。ま。の。い。ま。ま。  
あ。ま。さ。か。う。く。は。れ。い。せ。の。ま。ま。れ。と。う。せ。い。ち  
し。い。い。ま。ま。の。持。く。と。ら。曲。に。ま。く。後。り。て。何。れ。の  
あ。ま。さ。か。う。く。は。れ。い。せ。の。ま。ま。れ。と。う。せ。い。ち  
れ。鈴。の。並。入。ふ。こ。う。の。著。い。せ。れ。し。き。ま。も。カ。車  
に。七。車。より。つ。い。て。く。父。の。中。ま。正。續。の。縁。山。志  
い。と。く。れ。た。い。い。ま。ま。の。お。お。い。わ。り。一。お。の。れ。り。  
あ。く。蓋。の。た。も。氣。話。い。い。ま。の。似。る。人。を。お。お。本。ゆ。い







伊東隆安翁名波當監伊豆國人伊東次郎祐親入  
道我後天父乎主計止伊代二江戸乃城乃邊尔住利  
浦野氏乃女乎娶天寶曆十二年止云尔翁乎生都  
翁長天好久謙利好久謹利心直久思無深之初赤  
科隆春尔後天醫乎業止常陸國久慈郡太田郷尔  
移住羊漢字乎立川淳美尔同比倭学波土師熊文  
乎師止世利亦陸奥人北條玄養我心学乃昔尔思乎  
寄世利遂尔髮乎断天名乎道哉止改年後尔京都人  
小澤蘆菴尔名薄乎贈天歌作苗風流尔心乎深女  
其詠口世乃覺止人毛勝利家集乎桂林集止目

主計

久其波家乃號乎桂林堂止云便之紫苗文政二年乃  
正月許病床尔卧之同年乃七月十六日尔齡五十  
八歳身罷奴其程葬五十首七夕五十首乃歌詠  
女苗筆採魚天姪乃豊子尔書苗无之翁生時乎書  
和射中左太乃筋餘良愛多加利本乎請天乎習布  
者千五百人尔餘利其教子等翁我名乃空久朽  
止示元古嘆天石尔鑄娘祥余尔詞撰天与請布其  
我中豊子乎始止之吾道乎學夫人二多加礼毛  
天離礼辞夫便无秋由来乎書記之且詞化礼良  
余支比登能余久表之邊天之表志敬吉乃



比登良佐波尔。無良幾毛能。古呂布理於固之。  
知二彼三尔。支美仁比登之幾。毛能麻那夫。麻  
大不昆乃於也能。余支奈波。久知世須安礼登。毛二  
多良須。伊志尔惠良世天。古登都多邊。奈予之都  
多布流。古登乃余呂之左。文政四年五月。高田共清  
撰。門人藤原好秋謹書。

神山奥連の松屋記

下総國垣生郡版岡ノ里にありて一書よりくみまを  
りて美我れぬ所村田の穢録に翁の教  
れしものとうゆくむのいさく人々の二重葉神山

ノ奥連のうりけりきれひめる我れ居に延ねり  
いろくろての事思ひかたうとよまをくたうんさ海  
そくたるこハ余の教ふたれの日この中にははる  
た刀さやゆわけあてこりかゝる人たれはあけ  
し子ひさいれかしてたてまよな打たれしよ  
いともたれの學れんともいかにいへくまな重  
か居れしむねと多はるいよめよりてやてね  
の居てふ我れえおとてあつ此松さしやしひの  
まろりのや肉のえんやえんてあれ本はれはちま  
されくんはるしるくはあゆのし記まちちあり











かひよほくをせられしとれんれおんり  
それほくひたるそれとれんれ巻はと  
りねしとせしとせしとせしとせし  
るまはつらみもいふりれちしとせし  
しうかよひくあはるし江戸のへりね下  
奄にせめあるしと田舎とあり何れみく  
あまかこしとせしとせしとせしとせし  
かよくしとせし

猿田如意の松風舎れ祀

大舟はくふの家おしと目に孝た可れ法

ほくをみやり耳にふ高ふれね風とこしとせし  
あひとせしとせしとせしとせしとせし  
名は松風のやとつらねれし麻鳩まうとせしとせし  
日のかれたそしに舟りてつるにやと柔のねや  
れちんはとせしとせしとせしとせしとせし  
とせしとせしとせしとせしとせしとせし  
やあぬとせしとせしとせしとせしとせし  
後田名の如意とせしとせしとせしとせし  
しとせしとせしとせしとせしとせしとせし  
ねとせしとせしとせしとせしとせしとせし



廿七  
昔といひかゝるまゝかゝりしつゝたるまゝに  
う氏の按田より人に神代つたまゝに  
されていふに  
かゝるまゝに  
むしうに  
ふまゝに  
と  
は  
ひ  
神

寺田真竹堂記

か久庵焼くやまのいれに竹堂は移る木に  
里に世の寛文十二年といふ酒かめ  
なまのいれに  
人  
これに  
いり  
ぬ  
を  
れ















三ゆせぬわの心はくく垣れおらうくれをまね  
 たる刀祿川のさきりふむせにわたらふにやひ  
 をもたらりもやうくもたらりもられ大人にさひて  
 うたふれたるえ何り大人にさひ一日をれ家の名  
 をも月めやせねさりやれいおまのいおまのい  
 してせよのいおまのいおまのいおまのい  
 ねさのいおまのいおまのいおまのいおまのい  
 してふりがいおまのいおまのいおまのいおまのい  
 いおまのいおまのいおまのいおまのいおまのい  
 れいおまのいおまのいおまのいおまのいおまのい

ちれいおまのいおまのいおまのいおまのいおまのい  
 ていおまのいおまのいおまのいおまのいおまのい

緑亭記

第陸園行を致すに里の松山に伴はぬ  
 ねる美津貞揚いうたうくのみやい心うらな  
 人らりおれまのいおまのいおまのいおまのい  
 してまのいおまのいおまのいおまのいおまのい  
 かりおまのいおまのいおまのいおまのいおまのい  
 りそりこれいおまのいおまのいおまのいおまのい  
 本とれい名を勝をうらへく家の春をよにみ



とりきさふうまをさうてみせりれ厚とおとらひ  
へいといまはつゆひらく  
梓らもくももれみせりれいろもいもれ  
いとくしてまかえんねれ下宿  
文政三年とらふてれ神廿月れさうめり香  
れやのゆき

寺田長経の清齋日記

刀祢ゆれへにひせりの家けりれこれやとら  
まのゆきへいもまほくまもさうて  
秋れゆへ海の照月のやとらまのゆきとれ

かめで心をひまへていよまもくはうれいみの  
とれはつゆのにおもへていよまもくはうれいみの  
さうま治をする國とせめてまはつゆのゆきと  
れはつゆの。ゆきのまれ初花とれまもくは  
まのゆきとれまのゆきとれまのゆきとれまの  
ゆきのまれまのゆきとれまのゆきとれまの  
ゆきのまれまのゆきとれまのゆきとれまの  
ゆきのまれまのゆきとれまのゆきとれまの  
ゆきのまれまのゆきとれまのゆきとれまの  
ゆきのまれまのゆきとれまのゆきとれまの  
ゆきのまれまのゆきとれまのゆきとれまの



うたやせとらぬのさえをりたぬいさひさやく為の  
きぬのさひ<sup>老</sup>きよめぬにみひをようて<sup>新</sup>すま  
殺さし<sup>新</sup>とらぬし<sup>新</sup>の<sup>新</sup>一<sup>新</sup>ふ<sup>新</sup>ち<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>ぬ  
人ちり<sup>新</sup>り<sup>新</sup>お<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>た<sup>新</sup>ひ<sup>新</sup>み<sup>新</sup>の<sup>新</sup>ち<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>家<sup>新</sup>い<sup>新</sup>を  
り<sup>新</sup>一<sup>新</sup>と<sup>新</sup>り<sup>新</sup>こ<sup>新</sup>も<sup>新</sup>一<sup>新</sup>ま<sup>新</sup>の<sup>新</sup>家<sup>新</sup>の<sup>新</sup>ま<sup>新</sup>い<sup>新</sup>と<sup>新</sup>せ<sup>新</sup>一<sup>新</sup>り  
は文政三年の秋の事

常盤舎記

刀祇川の川くまの山おたふれとれ若木の  
も<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>一<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>書<sup>新</sup>よ<sup>新</sup>ハ<sup>新</sup>子<sup>新</sup>年<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>し<sup>新</sup>あ<sup>新</sup>と<sup>新</sup>り<sup>新</sup>を<sup>新</sup>は<sup>新</sup>あ  
て<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>一<sup>新</sup>と<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>一<sup>新</sup>た<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>一<sup>新</sup>そ<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>本<sup>新</sup>の<sup>新</sup>あ<sup>新</sup>ら

と<sup>新</sup>み<sup>新</sup>る<sup>新</sup>に<sup>新</sup>い<sup>新</sup>と<sup>新</sup>し<sup>新</sup>た<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>一<sup>新</sup>お<sup>新</sup>の<sup>新</sup>ま<sup>新</sup>た<sup>新</sup>い<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>ひ<sup>新</sup>一<sup>新</sup>な<sup>新</sup>え  
み<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>一<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>も<sup>新</sup>あ<sup>新</sup>と<sup>新</sup>の<sup>新</sup>若<sup>新</sup>木<sup>新</sup>に<sup>新</sup>と<sup>新</sup>り<sup>新</sup>を  
く<sup>新</sup>一<sup>新</sup>た<sup>新</sup>け<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>ひ<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>り<sup>新</sup>一<sup>新</sup>若<sup>新</sup>や<sup>新</sup>一<sup>新</sup>二<sup>新</sup>葉<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>り<sup>新</sup>か  
ち<sup>新</sup>一<sup>新</sup>若<sup>新</sup>き<sup>新</sup>い<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>り<sup>新</sup>か<sup>新</sup>く<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>て<sup>新</sup>く<sup>新</sup>た<sup>新</sup>本<sup>新</sup>に<sup>新</sup>え  
何<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>を<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>ね<sup>新</sup>よ<sup>新</sup>た<sup>新</sup>め<sup>新</sup>ち<sup>新</sup>一<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>さ<sup>新</sup>し<sup>新</sup>い<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>さ  
ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>に<sup>新</sup>む<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>り<sup>新</sup>一<sup>新</sup>お<sup>新</sup>し<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>て<sup>新</sup>た<sup>新</sup>何<sup>新</sup>あ<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>た  
ね<sup>新</sup>一<sup>新</sup>た<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>わ<sup>新</sup>一<sup>新</sup>お<sup>新</sup>の<sup>新</sup>ま<sup>新</sup>い<sup>新</sup>と<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>一<sup>新</sup>と<sup>新</sup>と<sup>新</sup>と<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>や  
い<sup>新</sup>せ<sup>新</sup>本<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>本<sup>新</sup>を<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>九<sup>新</sup>物<sup>新</sup>に<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>て<sup>新</sup>地<sup>新</sup>れ<sup>新</sup>の  
ま<sup>新</sup>よ<sup>新</sup>一<sup>新</sup>生<sup>新</sup>き<sup>新</sup>あ<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>と<sup>新</sup>り<sup>新</sup>出<sup>新</sup>た<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>ま  
は<sup>新</sup>ね<sup>新</sup>い<sup>新</sup>い<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>い<sup>新</sup>と<sup>新</sup>り<sup>新</sup>出<sup>新</sup>た<sup>新</sup>ら<sup>新</sup>ま



らにまゝれりうをがらうこの書せむにま  
たれみちきりーやーけしうとーいうてつね  
茶をためて何をいふー茶をたれた本のーけ  
これをよめよとていふとわかれぬまかやねりー  
たさいんやきりーむのまをり何やーとていふ  
うたれりう茶をたれた本のとうれとくみ村田  
れちんれ教をうけてねるたむるなをせむと  
何れいまをいへたかきりーうんてんてん  
本をたれた本の名をきりていふれりう  
れりうとていふていふていふていふていふ

総ておれりうとて茶をたれた合をたれりういふれ  
本書の氏を格とていふていふていふ

麻屋記

九いー地麻れ生えりうの古もれりう  
うんとおれりうとていふていふていふ  
村根川れりうとていふていふていふ  
きりーとていふていふていふていふ  
いーいふていふていふていふていふ  
ていふていふていふていふていふ  
名をいふていふていふていふていふ











婦やうらひしきいほりていふはなはなとて  
みるよ花山院右府外山黄門とよハききとて  
とてやんともれよきれうへんさんせれびえ  
人れまよれはらちんらふれぬあひとて  
ついでにちち我のまゝなれく又よりの  
るるれたての林もよとていふはなはな  
我のまゝとていふはなはなとていふはなはな  
たてのまゝとていふはなはなとていふはなはな  
いふはなはなとていふはなはなとていふはなはな  
よまはなとていふはなはなとていふはなはな

よまはなとていふはなはなとていふはなはな  
らとていふはなはなとていふはなはな  
字にふみとていふはなはなとていふはなはな  
のよまはなとていふはなはなとていふはなはな  
花翁よまはなとていふはなはなとていふはなはな  
いふはなはなとていふはなはなとていふはなはな  
とていふはなはなとていふはなはなとていふはなはな  
えとていふはなはなとていふはなはなとていふはなはな  
とていふはなはなとていふはなはなとていふはなはな

三葉浮具香に各はくも花



いさなりけりつとと氏をい葉浮といひ文れ名をも具  
治とらふらりしとて行をいへりてと  
相をもひてとていふたしんにい遂に父とて  
いかにちりて名を扱ふていそんて浮れ中  
いも考てとてさりりてい花にあらとていちりて  
い持れしとてい人いぬとていさかたはく  
いしりていさかたはくい具考とてい  
いへりてい

中村長静よかれし文

阿懐侏れ敬れつとと人オ村を静いとや九

かし學に心をいさめほく林れせみふとて林のい  
とらりていさかたはくい中園れ事書よとてい  
いりあせとてい手れあより信孫以てておの林  
いさかたはくいさかたはくいさかたはくい  
いさかたはくい清水濱に名つたおくらあとい  
いさかたはくい林のれとていすれつとてい河れとてい  
いさかたはくい心知にそれよといさかたはくい  
いさかたはくい信水氏の執學れ術にこそ何  
れ右とてい同やあといさかたはくいすといさかたは  
いさかたはくいさかたはくいさかたはくい



ほつれられず、それ志を申さんれをいれし  
なむいしむいしとらんこもひてこそ一文武あやせと  
とれ海舟のすむ何より二日に二日とせしついで  
余らねの下庵を待ひたぬとてせしこもひか  
より學れぬに何れれをみえて遂にみちと  
たごし一各をもあけぬとてはえとるうりけりそれ  
とりねのれにさしとるもちしけぬに、吾身後  
れあれかともをたえとるめおたやのれあ  
いづり、余がたてりりや、君のいみしきか  
かねておとけり新まれゆく、いしむとらめ

といもねてれれしとるれあ、そのし、此れめとれと  
せしとらとるいしむとる、いしむとるいしむとる  
れせんきとる、同様に、何れり、考れ、何れり、  
翁、本居氏、とよし、いしむとる、いしむとる、  
ふしとらとる、いしむとる、いしむとる、いしむとる、  
てさか、いしむとる、いしむとる、いしむとる、いしむとる、  
いしむとる、いしむとる、いしむとる、いしむとる、  
みとる、いしむとる、いしむとる、いしむとる、  
緒、れたえ、たると、いしむとる、いしむとる、  
心、いしむとる、いしむとる、いしむとる、いしむとる、



あひはかづりほよそ林よりぬこと文がまゝして  
何れとひいこゝに母の終る年日風といふ  
おれた病にふしてらんやまへはをりのか  
よりやまへしむたえりのことらつむゆかりた  
たもりのふまもつてほつてふやうと静のまや  
くまはほつてあひいほりまこれとちか  
こえにそゆのまよおの林へおれ二床の法をれ  
し松下うたぬうりたふしと打れるまあ  
ほつて世人はうたまさいとくひのうみまも  
たすしとつてまふまふとまふまふとあはは

八傳のどめおれた境まもつたおれは戸れまいつ  
うまにりてかおれひいおあうまもつとにす  
かたしとくおれひいこゝにめこれとねあひあ  
かん世もいふんとすうにぬんまむせむかた  
ほるに揃あさかりや以弘もおの林へいひやり  
おれしとゆあまこつとらしと  
せうちてまよふこつとらぬるた世中らるるゆ  
てましちりのりともいせりこた

古寫経帳實考跋

今より七冊と習何々のむが東大寺に







仁天明三丰刀伊歲乃夏能頌社延傍信乃松於羣立

留中尔種毛无支荀二本頌尔生出我日乎徑受志窠

節滋久弥加那體乃竹尔成奴里人羣集天以此彼神乃

靈驗乎示之給不尔古加志吉美合祀其處斯良志

二日向守平信之朝臣彼冷泉大納言為村卿乃風乎

學天歌口尔於彼志計笛城五首乃歌詠天其里尔

下之賜禮其一彼松於乃常盤能色尔契利天生

出希羅竹乃二本此外乃四首年今尔別當能坊尔秘

持有理此處乃里長本谷德鄰成民乎惠美憐夫心

深久公事尔就天勤志聞和安信之朝臣乃孫今能信

富朝臣乃仕人渡邊好禮登議利故君乃言也葉乎

石尔鑄天後仁傳樂武廼志余尔請天其詞遠撰樂

無余其忠心乎感天辭夫事無久聽天事乃由乎記

之且詞化天曰香取能夜佐原乃里仁瑞籬能文

枳世豫理都怒佐彼布齋以麻通利天人皆乃仰

義忍年道速振神能社尔玉匣二本乃竹野干玉

能一夜乃加羅尔靈之久毛生出仁雞離曾禮遠

斯母里乃彌千代尔榮曳那年驗能物登曾固領

須平朝臣乃喜煩以言祝麻志二其言乎世尔毛

顯彼之其歌遠後耳母傳樂語繼言繼去之登百



















りとせし積久しと成時い山上見の国は江れおに  
うらされたいまもいこく信する信の言をれい  
浪こいれいあさひまも言成海いこくあまのまよ  
うりともゆと信りて地は名に地をせくとおのい  
名古庵い浪こえをるこく名ふれ海流けれ名  
あまのかれ海をよこいれあま大是よれ名を  
れ海いこぬれ大御をれ終より名いなるれおをれい  
心こちりたる神代記の伊勢孫尊れ大御とをれ  
これよりこれいこくちをるをよこいれこく  
あまのえみこすれれこく心より名つけはせ

こくいれとくおのいこくいれいこく  
つういむく櫛あまよりくこくい海義あ御をのる  
あまのちりこくあまいこくあまをりこく  
えりこくあまいこくあまお親通つを志い  
おあよりこく櫛あまいこくあまいこく  
完塚れあまいこくあまいこくあまいこく  
うあまいこくあまいこくあまいこく  
いこくあまいこくあまいこくあまいこく  
れあまいこくあまいこくあまいこく  
樹の質いこくあまいこくあまいこく







人は川沿敷るをさへしつれつり月を照河  
とあゆみせまれとこめくれをさるにちるね

黒髪山石記

**南** 中村佛庵入るるに黒髪山にありけり  
下野園にわたりしけり  
れより宿屋にありけり  
れより日老れしあつたれみりくもせ  
りし黒髪山にありけり  
里山にありけり  
ゆいちりたり此をわたりけり

てつり一天のりちすりの中は丘河り  
河の敷河り河り河り河り河り河り河り河り  
ひかりのりくくくくくくくくくくくくくくく  
か作れ君のりくくくくくくくくくくくくくくく  
にまわつたれはやくくくくくくくくくくくくく  
そへてまかへくくくくくくくくくくくくくくく  
ろ此をれ名にわたりけり  
さるりしやのりくくくくくくくくくくくくく  
とまわつたれ山といつる万葉集に二つあり



そのいづれをり多く奉れついでとてかうくつてせし奉れ  
國ちよと海にのりし中はより不登れ二荒山の  
一れ名をとりしむしをりしとていひたりし人れ  
是れ記をとりし所はついでとてしつて此山天宮と  
し奉れとるに河門播磨みねよとていひけさゆと  
あつてとて日光山海影とていひたりし記をい使は  
式に二荒とせりしとて福地路とていひたりし  
弘法大沙のいしとていひ約はとていひたつに二荒  
と日光といひしとていひ吳をいひたつにうさといひ  
しとていひしとていひたつにうさといひしとていひ

されは社とせし名は二荒といひされ名は日光といひしに  
後に寺に名におかされしとて日光とせしとていひ  
りしとていひしとていひたつにうさといひしとていひ  
とていひしとていひたつにうさといひしとていひ  
つとていひしとていひたつにうさといひしとていひ

河はあつてしとていひたつにうさといひしとていひ  
たつにうさといひしとていひたつにうさといひしとていひ  
おいせぬ名はとていひたつにうさといひしとていひ  
たつにうさといひしとていひたつにうさといひしとていひ  
たつにうさといひしとていひたつにうさといひしとていひ  
たつにうさといひしとていひたつにうさといひしとていひ  
たつにうさといひしとていひたつにうさといひしとていひ  
たつにうさといひしとていひたつにうさといひしとていひ



かきつゝく... 人れ... 山井の... あり... け... け...

銀柚丸く...の辨

何れ... あり... け... け... け...

い... け... け... け... け...

菊池...の記

菊池... け... け... け... け...



信れとよくもんさるがーきりけさのりよれ都  
 け神田和らういとめるれはのーの葉池氏をれこの  
 恥後園ちさうかめさのさるや何さんしとーあ  
 かしとゆめとささこれみそ柳八玉神れとれと  
 くみ聖鹿六雁りあちいささとり四條大草れ  
 いねとせむひるさるもれいせねさくれ世に何い  
 れさくらふさささささささささささささささ  
 すれすれささささささささささささささささ  
 ささささささささささささささささささささ  
 何さくん世にいまに馬よさちらりねこれよあ

く信に急いさ俊しけ何あへくさささと此さく  
 ちさくおささささささささささささささささ  
 れ時よ何いさんはらやされよ名をれぬへくさ  
 んねのれれ終ひくささささささささささささ  
 かしささささささささささささささささささ  
 しねとさささささささささささささささささ  
 遣ちされ静は花とささささささささささささ  
 菊池男の庵丁とささささささささささささ  
 くさささささささささささささささささささ  
 ささささささささささささささささささささ  
 ささささささささささささささささささささ



世のちひいこへしきりやたやとくたひいりた菊  
池ととこころやかえとといふひて 宮安とそはねとせ  
るやとてうれ氏の業はなれやうていりる花はな  
ちれは花押よとりちりちりこころの料あはれこ  
たまさり料は菊よとりちりちりこころの料あ  
はれあてたうていりるもほいせし 和さたれ

蘆堂青月集序

秋れと中れ月うつととたよしとたひひりたや  
に清せとらしきりちりちりちりちりちりちり  
みさかりちりちりちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
みやこころのそらとれぬくもよのちりちり  
うた鳥れうれととい物れとらちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
まは本れ里にせとれれしあはれやれぬ  
まは本れ里にせとれれしあはれやれぬ  
ちの今宵れ月の心やれかきとらちりちりちり  
にちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
詞とこころをぬれいれとせとれぬとみとち











人れ名の... ねをりけに... 運書四年... 玄昉法師... 人れ國... 人れ本... 納め... 押... 文...

を押し用るは陰陽師... 納め例... 定嗣... 文...







